



転調へのドミナント

杉山雄一

## 第一楽章

---

5びよおまえー、4ん、3ん、・・・・・・ヘッドフォンを装着した若者の大きな声を合図にスタジオは一瞬静まった。直後、にぎやかなSEが響き渡り、女子アナの甲高い声とともに生放送がスタートだ。ゲスト席に座っている布施亮一はゆっくりと周囲を眺めた。少しはこの場にも慣れてきたのかな。今日で3回目の出演だ。

「今週もミュージックセラピスト、布施亮一さんをゲストにお招きしていまーす！」  
さっきの若者は台本を頭上でぐるぐる回し、観覧客に拍手を促している。  
彼のやりたいことはなんだろう？  
いつかはプロデューサーになって自分の番組をもってところかな。  
変な回り道をすることなく進んでくれるといいのだが・・・

布施にとってまったく無関係な芸能の話題を振られては適当に当たり障りのない返答を繰り返す。この時間帯はどうも苦手だ。  
「・・・・・・ではここでお知らせです。番組はまだまだ続いまーす！」  
このタイミングでいつもつついため息が出てしまう。

「・・・・・・布施さん？」

「え？あ、はい、すみません」

「ひょっとしてお疲れではありませんか？」

「いえ、やはりまだ緊張してるのかな？ごめんなさい気を遣わせまして」

「いいえ、とんでもありません。次が相談コーナーですね。また気合一発でお願いします」

「次ですね。わかりました」スタッフが襟元を直してくれる。「・・・・・・ありがとう」  
あまり御礼の言葉など聞いたことがないのか「あ、い、いいえ！」まだ少女の面影が残るスタイリストの卵は上ずった声で答えた。

「はい開始5びよおまえー、4ん、3ん、・・・・・・」  
彼は一日何度この言葉を口にしてるんだろう。最初の声出しは緊張したんだろうな。

「・・・・・・つまりあなたは旦那さんとこのまま生きていくのか、  
それとも離婚すべきかでお悩みと、そういうことになりますか？」  
男性アナは特有の機械的なトークでまとめた。

「それでは布施先生にお伺いしましょう、先生、よろしくお願いします。」

・・・先生か・・・それもどうも落ち着かないな。名前だけでいいのに。さてと・・・

「奥さんのおっしゃることを聞いていますとね、ちょっとイライラするんですよ」

「・・・・・・・・」突然で気おされたのか、相談者は無言だ。

「私だけじゃなく、ここにいるお客さんも視聴者の皆さんもきっと同じでしょう」

「あああ、また布施先生のスイッチが入っちゃいましたね」司会者の声でスタジオが笑いに包まれる。最初はバカにされているように思ったが、最近では気にもならなくなった。

「いいですか、奥さんの言っていることが事実なら、旦那さんずっとこのままだよ。そんなさあ、無職を景気や社会情勢のせいにはばかりしていて自ら切り開こうとする姿勢さえなく、挙句の果てにパチンコの毎日って、もうそれが答えそのものだよ。」

「・・・はい・・・」

電話音声ってどうしても1キロ周辺の音が強調されるんだな。本当に耳障りだな。このあたり解決できる技術が出来ればきっと売れるんじゃないかな・・・

「そして奥さんも似ているんだわ。旦那さんに。内容は違うけど次元が同じなんだよ。あなたは離婚したくない、でも旦那さんには変わってもらいたい。相手を変えようとしてばかりで自分から変わろうとしない。世間体もあるし離婚という大騒動は避けたい。自分のリスクは避けて相手に変わってくれってさ、そんな調子のいい話がどこにあるの。」

「・・・」

「いいかい？きっぱりぶった切るか、我慢して続けるか。絶対にどちらかしかないんだ。それをあなたは選択から逃げて時間ばかり費やしている。そんなの辛くて当たり前だよ。」

「・・・はい。」

「必要なのは選択だね。決めるんだよ。今日。そして決めたことに向かっていくんだよ。あのね、離婚離婚って人生の一大事みたいに思う人が大半だろうけどね、実は『離婚？それはおめでとう』で然るべきだと思うんだわ。だって自分が幸せになるために選んだ手段でしょ？結婚も離婚も。一歩進むことにおいてどちらも同じだと思うよ。そう考えたら少しは明るくならないかな。別に離婚も継続も勧めないけどね、幸せに向かうんだから。そのために欠かせないのが決断だよ。決めようよ。すぐに。」

「・・・わかりました・・・」

「あのさ、ピンクフロイドを進めるよ。1枚でいい、ジャケット買いでかまわないからまずは聞いてごらんよ。その壮大なスケールに圧倒されるよ。自分の悩みが小さく思えてくるから。狂気かアニマルズがいいな。ほんと、保障するから。まずは聞いてみてね」

「奥さん、よろしいですか？布施先生の言葉をかみ締めて、  
ご自分の人生を見つめなおすきっかけにしてください」

「どうも・・・ありがとうございます」

楽屋のお茶が毎度薄いのはなぜだろう。出がらしで経費節減かな。

・・・とん・・・とん・・・遠慮がちなノックが聞こえた。来週の打ち合わせか。

「はい、どうぞ」

「お邪魔・・・しますね」

「はい・・・」

「覚えていないかな？それともこんなに髪がなくなったら面影もなくなったか」

「?・・・?・・・!、わ、和田さんですか？」

「布施。久しぶりじゃないか！」

「び、びっくりしました。どうしてここへ」

「今、Gスタで歌番組のリハーサルしていたんだ。で、タイムテーブルを見たらお前の名前が昼ワイドのゲストで載っていたもんだから。つい懐かしくてな」

「いやあ、うれしいです。改めて、当時はお世話になりました。」

「はは、いいよ、そんな型どおりの流れはワイドショーで十分だろう。」

布施が「ゆうとブラザース」のベーシストとしてテレビに出まくっていた時代があったなんて、今の音楽ファンは誰も知らないだろう。

ファーストシングルがミリオンヒットとなり、

やっと少しずつテレビにも出られるようになった頃、強かにプッシュしてくれていたのが番組プロデューサーの和田弘文だった。毎週水曜日、ゴールデンタイムの音楽番組が和田の戦場であり、バンドは1ヶ月間出演し続けた。それがきっかけで国民的人気バンドになったようなものだ。

たとえそれが一時的なあだ花であったにせよ。

「でも和田さん、やっぱりすごいですよ。今でも音楽番組を仕切っているんでしょう？ひとつのことを続ける凄みを感じます。僕とは大違いです」

「いやあ、そう言ってくれるとうれしいけどね、音楽番組と言っても前とは全然違うんだ。スポンサーと視聴率という、二つの要素のためだけに電波をセールスしているようなもんだ。その点お前は見事に立ち直ったじゃないか。辛口コメンテーターの布施先生。」

「やめてくださいよ、お恥ずかしいです。」

「いや、まじめに思うぜ。一度芸能畑で売れちゃった人間がさ、  
売れなくなってどうなるか、イヤになるほど見てきたがお前は違った。  
しかも音楽をベースにしているんだろう？」

「はい。名前だけはミュージックセラピストですね。その中身は適当ですが。」

「謙遜するなよ、これでもお前の本、この前買って読んで見たんだぜ？」

「え？『不響和音クリニック』ですか？」

「そう。面白かったなあれ。相談の答えがどんどん本音に変化してき、  
最後にはちゃんと音楽に結びつくんだもんな。久しぶりに一気読みだよ」

「何と言うか恥ずかしいな。でも、いやぁ素直にうれしいです」

その時、和田の携帯が鳴った。「・・・そうか。うん、わかった。5分後だな、」  
「突然で驚かせたな。なあ、名刺くれないか？今度連絡させてくれよ」

## 第二楽章

---

新宿駅西口のはずれ、焼き鳥横丁は今でも昭和のままである。

5坪平均の小さな店が軒を並べている。それでも数件の全国展開FC店が見られるようになって来た。時代の趨勢はこんな場末にも触手を伸ばしつつある。

「なあ布施、お前いくつになった？」

ホッピーで赤らんだ和田が唐突に尋ねた。「40になりましたよ。」

「はあー。てことはあれから・・・」「10年ちょっとですよね」

この店の煮込みを食わせたい。勘定なんて言うなよ？たまにはいい格好させろよ。そんな和田の誘いで、二人は安い酒を前にしていた。

当時日の出の勢いだったバンド。シンガーである「ゆうと」の高慢さ。徐々にライブ会場が大きくなっていった頃の高揚感。売れなくなってきた時のみじめさ。その後の労苦。今に至るきっかけからその思いまで、男二人の会話は尽きなかった。

「それは？」刻々と表示が変わる携帯を見て布施はたずねた。

「ああ、一応局の発信するニュースはリアルタイムで把握しておかないとな。いつでも携帯にニュースが自動配信できるようにしてあるんだ。」

「へえ、さすがですね。音楽番組プロデューサーでもニュースをね。」

「国を左右する一大事の場合は担当番組がどうこう言っていられないこともあるからな。」

「なるほど。そりゃ大変ですね。」

「まあめったにないけどな。ところで布施よ、今はどうなんだ？音は出してるのか？」

「はい・・・と言いたい所ですが、もうほとんど趣味ですね。たまに渋谷や新宿の店には出ることがあります。セッションばかりですね」

「そうかあ。ゆうとや他のメンバーとは会ったりしてないのか？」

「ブラザーズ解散後は連絡していないですね。まああんな経緯でしたから連絡もしにくいですし、その後どうするかで皆も手一杯だったんじゃないかと。」



「そうか。もったいないな。俺さ、お前のベース、・・・」

ふと会話が途切れたまま、和田の視線は携帯を凝視していた。

「和田さん、あれですか、それこそ一大事ですか？」布施の声にも和田は無言だ。何分たっただろう、ジョッキに半分ほどのホッピーを一気に流し込んだ。

「・・・ゆうとが。今朝死んだらしい」

### 第三楽章

---

ゆうとブラザースはバンドと言っても結果的には「ゆうと」というヴォーカリストとそのバックに他ならなかった。事務所がバックのミュージシャンを集めてあてがったのだ。楽器陣は作詞作曲にもかかわることが出来ず、演奏印税プラス完全出来高契約だった。それでも売れ始めた以後は人生最大の収入が続いた。事務所は布施をはじめメンバーに対して楽器や消耗品の大量購入を勧める。経費計上であり、節税対策なのだがメンバーにとっては願ったりかなったりである。

そんな状況も長くは続かなかった。ファーストシングルのヒット、その残り火がバンドの財産であり、よく言う「一発屋」として見られ始める。結成3年後、ゆうと以外のメンバーは契約を切られる。ソロとしての再スタートが聞こえてくる頃にはメンバーも散り散りになっていた。ギタリストは故郷に帰って家業を継いだらしいし、ドラマーは音信普通だ。

その後ゆうとが取った行動は意外なものだった。

「過去のヒット曲を意識してほしい」事務所側意向に反し、実験的な楽曲を相次いで発表した。それが売れるわけもなく、結局半ば喧嘩別れのように契約は打ち切られた。その後「あの人は今」風の番組で名前を見ることがあっても、表舞台からは完全に消えた。

ゆうとブラザース。あのバンドは誰一人をも幸せにしなかった。

告別式には懐かしい顔があちこちで見られた。和田はもちろん、当時のマネージャー、ミキシングエンジニア、ツアーローディー・・・一瞬当時の空気が布施を包む。

「・・・布施。」

「あ、和田さん。先日はありがとうございました。」

「いやいや、しかし不思議だな。二人で会って飲み、その場でゆうとのニュースが流れた。あいつ、俺たちに何か言いたかったのかな」

「・・・そうかも・・・知れませんね」

その時会場からハウリングが聞こえた。喪主の挨拶か。「いこうぜ」和田の声に布施は従った。喪主と見られる女性が和装でマイクに向かう。型どおりの挨拶に続き、ゆうとのエピソードが語られた。

「あの人は・・・もう一回ブラザースで音を出したいと。そればかり言うておりました。立場や変なプライドもあって当時はどうしてもメンバーとの間に壁があったんだけど今ならば素直に同等のメンバーとして、バンドの一員として音が出せるはずだ、と。

ですがここ1年はそんな意欲もなくなっておりました。自分だけが取り残された。メンバーはもう自分の居場所を見つけて生きている。中には完全に軌道修正して自分の名前で生きているやつもいる。そんなすごいやつらを再びメンバーになんて迎えられるわけがない。永遠に再結成はできなくなったな・・・そんなことを言い始めてからはめっきりとお酒の量が増えていきました。そんなに強くないのに毎日歩けないくらいに飲み続けておりました・・・急性心不全とのことですが、きっとゆるやかに自らの意思で命を絶ったのか・・・私にはそう思えたりもします。」

布施はその場に凍りついた。喪主の言葉と自身のこれまで、そして故人の思い。いずれもリンクすることがなかったいくつかの線は音速で三次元化し、布施に押し寄せた。

ゆうとは俺のことを知っていた・・・そして・・・もう一回、心から同体になったアンサンブルを望んでいたのか・・・俺はそんな思いを慮るどころかむしろ怨みのようなゆがんだ思いがあったんじゃないか。ゆうとはいいよな・・・そんな僻みさえもなかったか。それが変な意地となって俺の背中を押し続けた。少しずつ名前が売れ出した自分を、いつかゆうとに見せ付けたかった。

「どうだ？俺だってただのバックメンバーってだけじゃないんだぜ？  
なあ？捨てたもんじゃないだろう？」

そんな思いがいつも沈殿していた。そしてどうにか生きる場所を見つけつつあった時、ゆうとはバンドを夢見ながら死んでいった。その夢をぶち壊したのは俺だ。  
俺が・・・俺がゆうとを殺してしまった・・・

すまなかった・・・許してくれ・・・本当にすまなかった・・・

「布施・・・もういい加減にしておけ」

新宿焼き鳥横丁、例の店で和田と二人、もうどれくらい飲んでいるんだろう。涙があふれ嗚咽し続ける布施を抱きかかえるように和田が連れてきたのだ。

「もう話してくれてもいいんじゃないか？なあ、どうしたって言うんだ」

「和田さん・・・俺はとんでもない人間です・・・」

「・・・」

「俺は音楽を・・・あれほど大切にしていたはずの音楽を・・・自分が生きるためのツールとしてしか捕らえられなくなっていたんです。在籍中も待遇の不満ばかり感じていました。解散後はゆうとを怨み、ねたんでいました。その感情が消えたことはありません。」

「・・・」

「だから・・・音楽から逃げ、楽器を触らなくなりながらもどこかで下らない意地もあってミュージックセラピストなんて始めたんです。ミュージシャンとしての立場なんてもうありやしないのに、なめるなよって言う思いばかり先行して・・・だから・・・キツイことばかり言っただけで周囲に『どうだ！』って思っていたんです。」

「・・・そうか・・・」

和田は生中のお代わりを頼んだ。

「煮込み、あっため直しておくね」店の母さんが気を利かせてくれた。

「でも・・・ゆうとは違った。純粹に音楽を考えていたんです。なのに俺はそんな気持ちを一切見ようとしないうち・・・自分のことだけ考えていたんです。あいつの夢を・・・心を踏みにじって来たんです。俺が・・・俺がゆうとを・・・」

「・・・もういいって。布施。やめろ。極端な考えするなよ」

「本当のことですよ和田さん・・・取り返しのつかないことを・・・俺は・・・」

「うん。お前の言うとおりであったら確かに取り返しつかないかもな」

「・・・」

「いいか？例えどんな事情があつたにせよだ。ゆうとは死んだ。奥さんの言葉を借りれば、自分の意思で緩やかに死に向かって行った。もう一回言う。どんな事情があつたにせよな」

「……」

「取り返して言うのはなあ……死んじゃったらそりゃ無理だ。お前は生きてるんだからさ。取り返すことはなんぼでも出来るんじゃないか？いや、言い古されたような慰めじゃない。今日のところは飲んで泣け。明日以後どこを見てどこに行くかだと思うぞ」

「……」

「イヤじゃなければ……付き合うぞ布施。」

客は二人だけになっていた。まだ煮込みは十分ありそうだ。

## 最終楽章

---

「・・・だからさ、あなたは結局自分の都合ばかりなんだよ」

いつもの喝破が始まった。もはやこのコーナーの売りになっている。  
厳しい言葉を楽しみに待つ空気がスタジオ中に満ちていた。

「確かに就職が難しい時代だよ。そこがチャンスじゃん。そんなね、たかが仕事、そう、たかがだ。たかだか就職のことくらいでこの世が終わっちゃうような感覚、そこに問題があるんだよ。面接に落ちたら次を見るんだ。そこで落ちたらまた次を見るんだ。」

「・・・はい・・・」

「あきらめるんじゃないぞ。いいか？この世のあらゆるプロフェッショナルはね、元はあきらめなかったアマチュアだったんだよ。あきらめるな。そしてどうせ決めるなら1ミリでも自分のやりたいことに近づくんだけ。あ、何が好きなんだ？」

「特に・・・ないです」

「それじゃあ向かう方向が見えなくて当然だぞ。生きてる以上、何かきっとあるはずだ。何をやっているときが一番楽しいのかちょっと考えてみようや」

「えっと・・・ドライブ・・・かな・・・」

「立派な趣味だよ。それでいいんだよ。ドライブ、最高じゃない」

「でも・・・就職に有利と言うわけには行きませんか・・・」

「だからさあ、どうしてなんでもかんでも駆け引きにする？あ、あんた打算ばかりか？ドライブに何か問題あるか？ありゃしないさ。好きなんだろう？いよいよ就職に困ったら代行運転の会社でひとまずアルバイトでもいいだろうし、カーディーラーに就職とかさ。好きなことのキーワードで動けば何らかの成果が出るはずだよ。」

「・・・はい。」

「ま。俺もそうなんだけどね。」

「・・・え？」

「いや、俺だって『本当にやりたいこと』から逃げてきたんだわ。劣等感の裏返しでさ、虚勢を張って生きてきたんだ。自分の都合しか考えずにね。最低だよな。」

客席がざわつき、アナたちは怪訝な表情だ。かまわずに布施は続けた。

「やっとわかったんだわ。好きなことを好きなようにやるべきだったってね。いつからでもいいんだ。早い遅いなんてないさ。まああんたなんか俺よりも全然若いんだから若干有利だろうよ。でもな、俺も負けないでやるぞ。競争しないか？どっちがより純粋に自分でいられるか、どう幸せに向かっていくのか。一回事務所に来なよ。語ろうぜ」

「はい。ありがとうございます。」

「俺、今日でこの番組もやめるし、こうして話すことももうないからさあ」

「ちょ、ちょっと布施先生、何を……」女性アナがさえぎった。

客席はさらにざわつく。布施は周囲をゆっくりと眺め、ピンマイクをはずす。

そして電話口の向こうに話しかけた。「な？今度事務所においでよ」

「先生、布施先生、どうしたんですか、困り……」

「うるっせえええ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

スタジオが静まり返った。3番カメラの横に立つADの姿を見た布施は歩み寄った。

「なあ、毎日楽しんでいるか？」

「・・・え？・・・あ、はい」

「そうか、それならいいんだ。今までサンキューな」

「・・・あ、いいえ・・・」

「すみません、ここでCMをはさみます」男性アナが場をまとめた。  
それを見て台本を放り投げ、布施はスタジオを後にした。背中の大騒ぎが心地よかった。

海風が心地よい立地が局の売りだ。布施は大きな社屋を見上げ、深呼吸した。

「さあて・・・まずは御茶ノ水行かないとな・・・やっぱジャズベだよなあ」  
独り言をつぶやきながらどこか楽しげに臨海駅を目指して歩く。  
頭の中では和田の言葉がリフレインしていた。

「最初に飲んだときにさ。言いそびれた事があるんだよ」

「なんででしょう？」

「俺さ、お前のベース・・・・・・・・好きなんだよな」

「あははは、そんなことでしたか。ありがとうございます」

「よく考えてくれ。これまで俺はプロとして何千人ものミュージシャンと接してきたんだ。  
その中でさ・・・好きなミュージシャンなんてそうそういないぜ？」

「そう・・・なんですか」

「これってすごいことなんだと思わないか？お前はすごいんだよ」

「・・・・・・・・」

「お前が本気で出す音を、心からの音楽をさ・・・聞きたいな。いつか」



「・・・和田さん」

「ん？」

「アマチュアのステージでもかまいませんか？」

「ああ、枝葉はどうだっていい。」

「・・・俺のやりたい音楽・・・」

「ああ、そいつをやってくれよ。」

布施の頭には一人のドラマーがいた。電話してみようかな・・・ま、先に1本だな。オールドフェンダーのいい感じに枯れたジャズベがいいな。

お台場の潮風がほほをゆっくりとかすめてゆく。布施の脳裏には最高にファンキーなグループが8バースでリフレインしている。忙しげに道を行く人並みの中、その背中は軽やかに臨海公園駅に吸い込まれていった。